

『戦後 74 年・

秋津（あさひば）の地名と戦争遺産』

— 重爆撃機「飛龍（キ-67）」を生産した官設民営の

三菱熊本航空機製作所の巨大な工場群とその関連施設を重点に —

1. 序章 戦後熊本市の重心は大きく東へ	1 ページ
2. 戦争遺産の概況	2
2-1 日中戦争までの戦争遺産	
2-2 三菱重工業（株）熊本航空機製作所の建設	3
2-3 陸軍4式重爆撃機「飛龍（キ-67）」について	6
3. 三菱重工業（株）熊本航空機製作所（略称. 熊航）について	8
3-1 製作所の工場群	
1) まぼろしの地名「阿蘇見通り」	
2) 「熊航」の工場レイアウト	
3) 年度別の工場建設計画	
4) 風雨に耐え組立工場は現存している	
3-2 工場と付属飛行場を結ぶ「誘導路」	9
3-3 付属飛行場（通称. 健軍飛行場）	10
3-4 技能工を養成した青年学校	13
3-5 付属病院（三菱病院から熊本市民病院へ）	14
3-6 福利厚生施設	16
1) 職員社宅 — 水菱園	
2) 工員社宅 — 健菱園と前菱園	17
3) 独身寮 — 健軍寮と秋津寮	
4) “ — 報國寮	
5) その他（江津荘・神水荘・白川寮・等）	
3-7 水源地（戦後頼りにされた健軍水源池）	18
3-8 その他の施設	19
1) 電気とガス	
2) 鉄道引込み線と市電延長	
3) 道路の新設と付け替え	21
4) 排水路の建設（健軍川と若葉排水路）	
3-9 従業員について	22
4. 三菱重工業（株）熊本航空機製作所の歴史的概況	24
5. 市東部も戦火に	25
6. 戦争遺産の現在の地名は？	28
1) 健軍町5900番地・6000番地・900番地の今は	
2) 健軍水源地	
3) 付属飛行場（通称健軍飛行場）跡地	
4) 戦後生れの新しい地名	
7. おわりに	30

（三菱物語・新熊本市史・ふるさと東部の歴史等参照）

平成 成31年4月25日・令和1年5月9日 16日

秋 津 公 民 館
（熊本地名研究会員 中村安幸）

「戦後 74 年

秋津（あさひば）の地名と戦争遺産』

— 重爆撃機「飛龍（キ-67）」を生産した官設民営の巨大な工場群とその関連施設 —

1. 序章 戦後熊本市の重心は大きく東へ

戦後熊本市は東部へ大きく発展し伸びた。

1) 戦後の緊急農地開拓は軍用地 ※ 1町歩) = 3000坪 = 9900m²

終戦後直ちに食料確保のため、国策として緊急農地開拓が推進された。

それは軍用地であった。昭和20年(1945)11月、熊本県では「健軍飛行場(400町歩) 帯山練兵場(80町歩) 渡鹿練兵場(20町歩)・廣安演習場(1町歩)」など14の軍用地(2,248町歩)の開拓方針が決定した。

かくして「健軍飛行場・帯山練兵場・渡鹿練兵場・廣安演習場」にも直ちに開墾の鍬が撃ち込まれ、入植した人達が鍬一本で畑に変えた。健軍飛行場も滑走路部分を除き、畑地化していった。農林省は昭和23年(1948)入植者に開墾地を払い下げた。

2) 東部の人口増加は相次ぐ小中学校の新設が物語る

熊本市東部の発展は目ざましく、東部の人口増加は小中学校の相次ぐ新設となって現れた。明治42年(1909)の白川小学校以来45年ぶり、戦後の新設第一号として「託麻原小学校が誕生以来昭和年間の小中学校の新設は、熊本市東部と北部地区であり、その大部分は東部地区であった。昭和29年(1954) 託麻原小学校 (大江・砂取・出水校区より分離)

31年(1956) 泉ヶ丘小学校 (健軍小の分室が独立)

34年(1959) 帯山 小学校 (託麻原小の分室が独立)

36年(1961) 若葉 小学校

39年(1964) 尾ノ上小学校 (健軍小校区より分離)

41年(1966) 西原 小学校 (託麻原小・帯山小校区より分離)

46年(1971) 桜木 小学校 (秋津小・健軍小校区より分離)

49年(1974) 東町 小学校 (尾ノ上小・健軍小・桜木小校区より分離)

54年(1979) 帯山西小学校 (帯山小校区より分離)

〃 (1979) 月出 小学校 (尾ノ上小・帯山西小校区より分離)

55年(1980) 出水南小学校

57年(1982) 健軍東小学校 (東町小校区より分離)

59年(1984) 託麻南小学校 (託麻西小・月出小校区より分離)

60年(1985) 山の内小学校 (月出小・東町小校区より分離)

平成 3年(1991) 長嶺 小学校

10年(1998) 桜木東小学校

以上が物語る様に、熊本市東部の戦後著しく発展したのは軍用地・軍需施設 取分け三菱重工業 航空機製作所とその関連施設の膨大な土地、即ち戦争遺産が発展の基因であり、大きく寄与している。しかも今なお多くのその恩恵に浴している。また、人材的にも技能工を養成した青年学校出身者など

戦後熊本の機械製造業の発展向上に大きく貢献している。

2. 戦争遺産の概況

2-1 日中戦争までの戦争遺産

軍都熊本には、大江地区のみならず東部にも「帶山練兵場・小峯原射撃場・陸軍病院健軍分院」があった。さらに小峯原射撃場南東には「廣安演習場」2万6千坪があった。（現廣安愛児園）

（**広安愛児園**）

1) 帶山練兵場 （所在地 帶山1～7丁目）

- 現在の帶山地区は、昭和20年(1945)8月までは、廣畑・健軍・出水の三村に跨がる約25万坪の陸軍帶山練兵場であった。

北と西端はほぼ藻器堀川を、南端はアルコール往還（旧県道戸島熊本線）と三菱引込み線を、東端は鉄工団地通りを界とした託麻原台地であった。

ほぼ中央部の「大演習觀兵式記念碑」と一本榎木（現帶山小学校入口バス停付近）がシンボルとされていた。

- 明治23年(1890) 渡鹿練兵場とともに、帶山演習場がつくられていた。

山崎練兵場が大江村に移転後も花畑旧藩邸に屯営していた歩兵23聯隊が、新市街発展の阻害要因となっていたので渡鹿練兵場の中に約3万坪をとって造営移転することになった。

それで、渡鹿練兵場が狭くなるので、渡鹿練兵場と近接している帶山演習場の東方を拡張して大練兵場とすることになった。大正13年(1924)廣畑・健軍・出水村に跨がる畑地約10万坪が買収され、大練兵場が出現した。

- 同13年に帶山練兵場と命名され、同15年(1925)に使用開始された。

熊本市の近代化発展の基礎作りのために帶山練兵場は生まれたのであった。

広さ25万坪の土地は、練兵場から開拓農地へ、さらに宅地へと変化して現在の帶山地区が生まれた。

2) 小峯原射撃場（所在地 小峯2～4丁目）

健軍町の最も北東部、東は戸島と益城、北は長嶺と接する「字小峯」は、中央に小峯原と呼ばれる原野を囲んで、周囲は小峯林であった。

この小峯原は、藩政時代から調練場として利用され、鉄砲の練習場になっており、「竹宮調練場」と呼ばれていた。

明治4年(1871)鎮台設置に伴って鎮台用地となる。

大正15年(1926)帶山練兵場の使用開始と同時に、小峯原の東部に射撃場がつくられた。標的を並べて小銃の実弾を撃ち込む東西の防壁の土手は梯形をしていた。

（それまでの廣安演習場から分離）

正式名称は小峯原射撃場だが、通称台場と呼ばれ、昭和20年(1945)8月まで陸軍の管理であった。藩政時代、調練場であった小峯原・小峯林は、射撃場・開拓農地・茶業試験場などを経て、現在は東稜高校・県立大学第二グラウンド・九州総合通信局電波監理部等の公共施設と閑静な住宅地になっている。

3) 陸軍病院健軍臨時分院 (所在地 京塚本町)

- 現在住宅地となっている京塚本町は、かつて陸軍病院の健軍臨時分院であった。

陸軍病院は、鎮西鎮台がおかれた明治4年(1871)12月に鎮西鎮台病院として設置されたのに始まり、同8年(1875)に熊本城二の丸に施設が作られて軍の傷病兵の診療を担当してきた。

日清・日露戦争と戦争の拡大とともに、この医療施設も増設、拡大を続け、名称も熊本衛戍病院から熊本陸軍病院と改称された。

- 昭和20年(1945)8月の終戦時には、熊本第一陸軍病院(熊本城二の丸)・熊本第二陸軍病院(現在の玉名市)・健軍臨時分院があり、藤崎台にもバラック病舎を建てて傷病兵を収容していた。

- 同12年(1937)7月日中戦争(支那事変)が始まる。この日中戦争による戦傷病兵を収容するため、同13年9月健軍町京塚に陸軍病院健軍臨時分院(36,000坪)として開院された。

- 終戦後3ヶ月を経て、陸軍省の所管であった陸軍病院は、厚生省に移管され、熊本第一陸軍病院は「国立熊本病院」・熊本第二陸軍病院は「国立玉名病院」と改称し、スタートをきったが、健軍臨時分院は閉鎖された。

- 普通教室を全焼した隣接の熊工は、実習工場を教室代用にしたが、尚不足するため健軍分院の病棟3棟を譲りうけ仮教室として使用した。

昭和20年12月より約1ヶ年余りの期間であった。

- 同21年初めから、健軍分院跡にも住宅営団で戦災者、引揚げ者のための簡易住宅の建設が始まった。これが発展して現在の住宅地に至っている。

同45年(1970)10月に、健軍町京塚から京塚本町となる。

2-2. 三菱重工業(株) 熊本航空機製作所の建設

- 昭和16年(1941)9月当時の陸軍航空本部から「大型機月産50機」の増産命令がだされた。

三菱重工業(株)は、熊本市健軍町・上益城郡秋津村・飽託郡廣畑村の広大な畑地に

同17年6月熊本航空機製作所が官設民営工場として建設した。

- 当製作所は、陸軍重爆撃機「飛龍(キ-67)」の機体を製造、第16製作所(発動機生産)から供給される発動機(ハ-104)を組み付け、試験飛行の後陸軍省に納入した。

約180万坪(594万平方m)にも亘る広大な土地を買収し、工場を建て、付属飛行場を造り青年学校では技能工を養成し、従業員の福祉厚生施設(社宅・寮・病院等)を建て、道路や排水路を造り、鉄道を引込み、市電を敷き、4万人にもものぼる人員を集めた。

終戦までの飛龍の生産は46機であった。

- これだけの工場と関連施設を短期間に立上げることができたのは、航空機増産という当時の至上命令により、軍の監督統制のもと突貫工事で行われた官設民営工場という特性と当時の時代がもたらした力による。

- 当製作所は、終戦と共に航空機工場の清算にはいった。その後民有資産を活用して九州一の農機工場を目指し、農機の製造に着手したが思うに任せず、昭和24年(1949)秋、ついに閉鎖のやむなきに至った。

- 三菱が健軍にきたことによって残されたものは、広大な工場用地と青年学校及び寮社宅などの住宅、水源地、病院であったが、それらに起因し波及効果を生み、今日の熊本市東部発展に寄与

したところ大である。

工場・飛行場・青年学校・寮・社宅用地・水源などの配置は「付図1」の通り

1) 熊本航空機製作所建設決定まで

- 昭和16年(1941)9月、陸軍航空本部より三菱重工業(株)に対し「大型機50機、航空発動機、1500馬力級月産150基」の増産命令がだされた。

三菱本店は、直ちに航空機本体は「名古屋航空機製作所(略称 名航)」に、発動機は「名古屋発動機製作所」に計画書の作成を指示。

- 名航では既に増産拡充のための新工場を建設する余地はなく、他に工場立地を求めざるを得なかった。

- 三菱としては「協力工場、人的資源、土地、航空機工場の非集中化など」の面から新設される工場をうまく運営していける場所として瀬戸内の姫路地区を選び、工場レイアウトも合わせ検討し。陸軍省に申し出たのである。

陸軍省はこれに反対し工場を熊本に建設することを強く要求した。

陸軍航空本部は熊本建設を固守するについて、「黒石原、清水の旧幼年学校跡地、健軍地区を候補地としてあげて来た。

- 昭和16年12月下旬、現地視察ということで、陸軍航空本部及び名航の関係者がこれら候補地を視察した。その結果、黒石原と幼年学校跡地にはそれぞれ難点があり、最後に見た健軍地区は、はるか東に阿蘇を望む「託麻ヶ原台地」の 広大な地域であり、土地造成も殆ど手間がかからず、かねて会社として検討して工場レイアウト図からみても、ここが一番適切であるということになった。

視察団はその日宿舎に帰って地図の中に赤線で四角形を描き、工場建設用地は熊本市郊外の健軍と内定した。昭和16年(1941)12月31日であった。

- この熊本航空機製作所は「兵器等製造事業特別助成法」に基づき官設民営の工場として建設されることになった。即ち官「陸軍」が工場施設を建設し、民「三菱」が経営するというやり方がとられた。

2) 土地買収はじまる

- 昭和17年(1942)に入り 土地の買収が始まるが、官設民営工場であったため、種々折衝の結果、「工場施設と飛行場敷地」は陸軍航空本部が、三菱が「青年学校(グラウンド・教室・実習工場)、病院、社宅、寮、クラブ等の福利厚生施設の用地買収・建設を進めることになった。

- たまたま、官設民営工場であったため、買収用地の総括窓口は熊本市役所、買収用地の発表、申渡しは陸軍当局がそれぞれ担当した。

計画書によると、「主工場40万坪、飛行場100万坪・寮・社宅などの厚生施40万坪、合計180万坪という土地が必要であった。

- 買収に当たって、数百人に及ぶ地主さんに対し、集合場所を指定した「召集令状」がだされ、当日市公会堂に知事・市長・地元選出議員参列のもとに説明会が開催された。

陸軍航空本部は地主に対して「時局の重大性をよく認識され、『土地の赤紙』と思って賛同を得たい」と協力要請を行っている。

- 会場の市公会堂周辺には憲兵・警察官が配置されており、耕作者等皆理解ある態度で協力し、異議をとる者は一人もなく買収発表会は終了した。

3) 建設工事はじまる

- 工場用地、厚生施設用地などの買収調印は順調に進んでいった。
航空機工場の地鎮祭および起工式は、昭和17年(1942)6月15日に行われ、のどかな田園地帯に、朝早くから夜遅くまで、建設の槌音が鳴り響いていった。
- 工事は工場群、飛行場、青年学校、寮、健康園社宅、水菱園社宅と、それぞれの拠点を中心にほぼ同時に着工し作業が進められていった。
- 工事の手順として当然、建設資材を搬入する搬入路の着工から始まり、建屋・道路等の測量、杭打ちが随所で進められた。
健康園の土地は冬になると霜柱が立ち、歩くとザクザクと音がした。そして日中の陽で、それら霜柱が溶けて地面はぐちゃぐちゃになった。 そんな中を工事は着々とすすめられていった。
- その施工にあたっては三菱地所(株)が設計ならびに工事監督を担当し、工場建屋は「竹中組」が、厚生施設は「大林組」が担当することとなった。
- 工場の工事着工は当然のことながら、「基礎動力・保管倉庫・板金・工機・機械各工場、そして塗装・組立・整備工場」と作業の流れに従って前工程の工場から優先的に建設されていった。
- 厚生施設は緊急性に依拠して第一期工事と第二期工事にわけて進められていった。即ち名古屋からの基幹社員が続々来るので、そを受け入れる社宅が早急に必要であること、また青年学校を昭和18年4月に開校しなければならないことからこれらの工事を最優先の突貫工事とした。

4) 熊本航空機製作所発足

- 昭和17年(1942)以来、「名航第二建設部」、「臨時熊本工場建設事務所」、「熊本工場建設事務所」で工場の建設立上げ業務が進められてきた。
昭和19年(1944)に入ると保管倉庫等収容建物が完成し、部品工場、機械工場、工機工場等は外郭が出来ており、機械などの内部設備も着々設置されてはあったが、こういう時勢でもあり、すべてが計画通りには進まなかった。
機械設備も設計通りには揃わず、能力的に不均衡なまま生産に入ったため、完全な生産には程遠かった。
従ってこの頃まではまだ「名航」の支援がなければとても独立してやっていく能力はなかった。
こんな状況下ではあったが、昭和19年1月1日を以って熊本航空機製作所と独立発足した。
- 工場の建設と航空機の生産が並行して進められた。従って部品の生産が遅れ、当初は名古屋から送られて来たものを熊本で組立てるという方式をとっていた。
時に緊急不足部品が生ずると名古屋へ行ってかき集めてくるという、いわゆるリックサック部隊(何十人という組)を派遣し、熊本―名古屋間の鉄道運送屋が始まった。
片道24時間かけ、切符入手、社内持ち込み荷物の制限などの困難なことが多かったが、リックサック部隊に頼らざるをえなかった。
- こうして「熊航」での作業は設備の充実・完成と並行して部品製造がどんどん進められていっ

た。

5) 1号機進空式(昭和19年4月29日)

- 漸く春の兆しが出始めた頃、キ-67完成機の解体部が「熊航」に搬入された。熊航一号機である。これらの部品の整理には事務系職員も毎晩10時過ぎまで残業し、まさに熊航従業員が一丸となって作業に当たった。
- まだ未完成の組立工場では再組立工事が始まった。
名古屋から転勤の基幹工員を中心に、機体組立技術を取得してきた人達によって「飛龍」が組立られていった。
- 4月に入りほぼ完成、最終整備を経て、晴れて天長節を期して、この「熊航」での一号機の進空式が行なわれた。
純熊航製ではないが、熊本航空機製作所として発足した手前、従業員の生産意欲向上を期待して出来るだけ早い機会に飛ばそうということになり、この佳き日に選ばれたのである。

2-3 陸軍重爆撃機「飛龍(キ-67)」について

最新鋭の

「熊航」で生産された航空機は、4式重爆撃機「飛龍(キ-67)」であった。

1) 飛龍(キ-67)の諸元

〔機体〕	全幅	22.50m	翼の面積	65.85㎡	乗員6～8名	
	全長	18.70m	自重	8,649kg		
	全高	7.70m	全備重量	3,765kg		
〔発動機〕	名称	三菱4式1,900馬力発動機（ハ-104）				
	型式	空冷2重星型18気筒				
	基数	2基				
	離昇出力	1,900馬力				
	燃料	3,885ℓ				
〔性能〕	最大速度	537km/h（高度6,090m）				
	巡行速度	400km/h（高度8,000m）				
	上昇時間	高度6,000mまで14分30秒				
	実用上昇限度	9,470m				
	航続距離（正規）	3,800km				
〔武装〕	（甲）12.7mm	単装旋回砲	3門	乙）12.7mm	単装旋回砲	3門
	20.0mm	旋回砲	1門	12.7mm	連装旋回砲	1門
	爆弾	800kg		20.0mm	旋回砲	1門

飛龍には、「前方、後上方、側方2ヶ所・尾部と5ヶ所に砲座があり、この砲座の部分は、索敵視界をよくするために、ほぼ全面風防ガラス張りであった。（陸軍では口径11mm以上は機関砲）
〔機影は付図2、及び付図3を参照のこと〕

2) 飛龍（キ-67）の生産機数

- 「熊航」は、初めはノック・ダウン方式で生産し、逐次量産に入る予定であったが、熊本地区、九州地区には協力工場・部品専門工場が限られ、ほとんど名古屋から部品を運んだり、加えて戦況不利による工場疎開等による工場機能も落ち、思うようには生産出来なかった。

「熊航」で終戦までに生産されたのは46機で、実戦に使用されたのは10機もなかったと云う。

- 中島への「呑龍（キ、49）」の開発指示に、つづいて昭和14年に三菱に対し4式重爆撃機「飛龍（キ-67）」の研究内示。

同16年に正式に試作命令。同17年12月試作1号機完成。同19年3月から量産開始。

合計では	三菱	名航	560機	
		熊航	46機	計 606機
	川崎	91機	総合計	697機 であった。

- 優れた運動性がこの飛行機を雷撃機にもし、75mmの高射砲を積んだ防空戦闘機（B29迎撃用）にも改造変身させられた。

終戦まで主に本土飛行場を基地として任務につき、昭和19年11月の台湾沖航空戦に参戦以来戦争末期に奮闘した。

昭和20年4月に入ると

軍用飛行場化した三菱の付属健軍飛行場にも、飛龍で編成された第60戦隊が配備され、実戦部隊として沖縄攻撃に出撃していた。

- 「呑龍（キ、49）」は、胴体が後尾になるにつれ、直径が小さくなり、居住性が悪かったが、「飛龍」は、機首から胴体尾端まで直径が殆どかわらず、居住性が優れており、外観もスマートで「キーン」という独特の金属音を出して飛んでいた。

それはエンジンの強制冷却ファンのせいであったとか。

3. 三菱重工業（株）熊本航空機製作所について

健軍町のほぼ中央部に「製作所の工場群」を配置し、南から北に向けて工程系列の配置計画。「誘導路」で工場と付属飛行場とを結び、帯山練兵場と接してその東方に付属飛行場を設置。「製作所の工場群」の南側に東西の通路をはさみ、技能工を養成する青年学校と病院を予定し、終点から西、電車通りの南側に「寮・社宅」などの厚生施設を配置した。
（詳細 付図1を参照）

3-1 製作所の工場群（東町1丁目～4丁目）

1) まぼろしの地名「阿蘇見通り」

新工場のレイアウト計画図は、将来を見込んだ理想的なものであった。かつ将来何らかの形で残り、熊本市の発展に寄与できるものにしておきたいとの考えがあった。

工場敷地を真東と真南の長方形（約970m×約1,520m）にとった。しかしよく見ると阿蘇に向かって12度ほどふれていることが分かったので、工場建屋も12度ほどそれぞれ振れた配置にレイアウトした。

これは工場の真中を南北に貫く大通りのどこからも阿蘇連峰がよく見えるようにするためであった。

この大通りを「阿蘇見通り」と名付けようと、計画にあたった技師達は夢をふくらませていたという。戦時中の工場建設にも若い技術者のロマンが秘められていた。

2) 「熊航」の工場レイアウト

南から北に向かって「作業の流れの順序、工程順に配置されている。
別紙「付図4」のとおり。

- 工場建設に伴って、従来からの字名「藤原・中窪・山立窪・八窪・中尾口・七反田・一塚」等は消され、公的な地番は一筆に合筆された。

製作所と青年学校敷地は、「健軍町5900番地」となった。

- 「熊航」では、製作所の敷地を、東西4区分、南北6区分と合計24区分のゾーンとした。

そうして東西区分を西から「NO100・200・300・400」と南北区分を南から「NO10・20・30・40・50」と所番地を付け、工場の位置を明らかにした。

NO 150	NO 250	NO 350	NO 450
140	240	340	440
130	230	330	430
120	220	320	420
110	210	310	410
100	200	300	400

3) 年度別工場建設計画

- 工場建設計画は、昭和17年から同19年までの年度計画になっていたが、再々見直し修正が行われており、当初計画通りには進んでいない。
当初計画では、昭和17年(1942)度には
「工機工場(N0120)・板金工場(N0220)・機械工場(N0320)・及び倉庫(N0210)・熱処理工場
同18年(1943)度には
「組立工場(N0240)・部品工場(N0230)・木工場(N0150)・第一事務所(N0130)等
同19年度(1944)には
「部品工場(第二)(N0330)を始め不足倉庫の追加工事等をそれぞれ建設することになって
おり、その後、第二組立工場(N0340)・総組立工場(N0250)を初め必要に応じてまだ増設
できる敷地だけは確保されていた。
しかし、同20年(1945)に入り空襲が激しくなると増築はおろか、工場疎開が始まり、組立工場
以外はもぬけ空同然になった。
- 工場建物は当然生産ラインの初めの方から体制が整えられていった。名古屋から運ばれて来た
部品、材料等を格納、保管する部品倉庫が最初に完成した。
その後大きな建物としては「板金工場・機械工場・組立工場・工機工場」が、順次完成していった。
これら昭和17年度着工計画の主要建物が完成したのは、昭和19年春から夏にかけてであった。
- 「熊航」は官設民営であり、工場は官設であったが、資材は統制下にあって鉄鋼材の使用は極度
に制限を設け、工機工場とか機械工場の様に初期に建てられたものは鉄骨であったが、途中からは
木造になったりして、工場の建設も予定より遅れた。
- 昭和18年着工分、同19年着工分の建屋工事があったが、これらがほぼ完成したのは、昭和
20年に入ってからであり、今度は疎開が始まるという皮肉な現象となった。

4) 風雨に耐え、組立工場は現存している。

陸上自衛隊健軍駐屯地〔西部総監部〕内にみえるノコギリ型の建物は、「熊航」の組立工場の跡である。(第一組立工場(N0240)の計画の一部)

横幅90m×奥行220m×高さ屋根まで17m。空襲で屋根は吹き飛んだが、鉄骨は残った。機銃掃射の弾痕がどこかに残っていると云う。

現在は、西部総監部と所属部隊が、装備の整備工場や倉庫として使用しているという。

3-2 工場と付属飛行場を結ぶ「誘導路」

- 製作所での作業工程を終了した機体は、誘導路を経て付属飛行場の整備工場に送られる。
道南バス停から赤坂外科前・本庄内科前・新外入口を経て健軍川を渡る道路、約700mがこの誘導路跡の一部である。
道南バス停付近は、幅約100m位の大きな凹型に、新外～尾上の段丘部が削られていて、
誘導路は、幅約100m×約700mの大きさであった。

- 完成機を、総組立工場から やや上り坂を上った整備工場まで運ぶのに牽引車もないので、人海作戦で何十人という人が「ヨイサ、ヨイサ」と押していったと云う。

3-3 付属飛行場（通称健軍飛行場）

昭和17年(1942)、工場建設用地買収と共に完成機の試験飛行場として併設することになり、飽託郡廣畑村と熊本市健軍町に広がる畑地58万坪が買収された。
航空機増産という当時の至上命令で、西松組の担当で人海作戦の突貫工事で、同18年に完成した。
通称「健軍飛行場」と呼ばれる付属飛行場は、当初はその名の通り、製作所で生産された重爆撃機「飛龍（キ-67）」の試験飛行場であったが、昭和20年(1945)になると軍用飛行場となり、実戦部隊が配備され、空挺特攻隊もここから出撃し、本土決戦基地として終戦を迎えた

現在の「月出1丁目～8丁目、長嶺南1丁目～4丁目、長嶺西1丁目・帯山8丁目と9丁目の全域と長嶺南6丁目の一部」がその飛行場の範囲であった。

飛行場の西南端（三郎集落の東）に「縦50m×横70m」の整備工場が併置されていた。

滑走路は、コンクリート打ちされた現在の空港とは違って、ほぼ中央帯で離着陸時には、土煙があがるような状態であった。

〔付図1 参照〕

1) 付属飛行場

- 昭和18年終わりには、一応滑走路（砂利敷 1,500m×80m）が完成した。
早速名古屋からの連絡便が離着陸し、工場への部品の輸送、連絡に使用を始めた。
- 同19年4月29日には、「熊航」で再完成された飛龍第一号機がここから離陸して、従業員を始め、応徴工、女子挺身隊、動員学徒らを感動させたのである。
- 整備工場には整備の技術者と三菱のパイロット1名と陸軍の監督官が常駐していた。監督官は領収飛行の操縦も行うパイロットでもあった。
- 整備工場内には、2機収容であったが、時には斜めに入れて3機収容したこともあった。
完成機の整備作業のエンジンラン等は整備工場前（東側のエプロン）でおこなった。
- 20年にはいると、一機でも多く一日でも早く前線へということで、皆鉢巻きをしめて頑張っていた。
前工程の各工場が日程を守るため、未完成のまま後工程へ送ってくることがよくあった。
例えば、総組立工場で計画日時に達するとそのまっ整備工場へ送ってしまった。
従って、これら未装着品や未完作業は組立工場の人が機体を追いかけて来て作業をした。
また、時には最終工程である整備工場にシワが寄ることもあった。
- そのせいか、整備工場に入ってから半月もかかかって、やっと試験飛行に入ると云う状態であった。
順調な機体であったら一週間程で試験飛行に入った。試験飛行は三菱側で3回飛び、最後は監督官が飛び、不具合がなければOKであり、陸軍に渡した。

2) 軍用飛行場化(陸軍熊本飛行場)

戦局も厳しくなった昭和20年4月には、本土決戦の基地となり、飛龍(キ-67)で編成された陸軍第16飛行団の飛行60戦隊と17独立飛行隊が健軍飛行場に配備された。

沖縄に強行着陸した「空挺特攻 義烈空挺隊」もここから出撃した。

- 飛行場南東端の区域外(現長嶺南6丁目)に「大刀洗陸軍飛行学校熊本教育隊」が置かれ、複葉の練習機(通称赤トンボ)で基礎的な訓練が行われていた。排水路(現健軍川)の南東部の曲折する部分は、赤トンボを滑走路まで誘導するため、二つの暗渠になっていた。

この暗渠も一昨年の健軍川の改修でなくなり、戦争遺産が一つ消えた。

- 軍用飛行場となっても、三菱としては製作所で生産された飛龍の試験飛行、領収飛行を始め、その間の名古屋との離着陸に使用。

南東部の教育隊も訓練のための離着陸に使用。北側にあった陸軍の部隊では作戦上及び訓練等の離着陸に使用、あるいは他部隊機の不時着用地として終戦まで使用された。

- 実戦部隊の司令部・戦闘指揮所は滑走路の北側、兵舎、飛行機の駐機、整備などは、飛行場の北側や東部におかれ、周辺の長嶺の4集落や小山御領は後方支援の基地化の状態であった。

- 重爆撃機を敵の空襲から守るため、飛行場の北・東側の山林には、縦横に走る誘導路で結ばれた多くの掩体壕がつくられた。収納された飛龍の上部は木の枝などで偽装していた。

掩体壕は遠くは神園山や小山山麓まで延びていた。

その無蓋の掩体壕が迎八反田(現長嶺西2丁目15番)に一基だけ完全な姿で保存されていたが平成24年の5月の連休明けに力尽きて姿を消した。

戦闘機用は各地に残っているが重爆撃機用の盛り土をした無蓋型が当時の姿で残っているのは珍しく、数少ない貴重な戦争遺産で惜しまれる。昨年、戸島本町(北向き)の竹林で発見されたが、保存されず、なお誘導路の跡は、託麻西小の北を通して御領台地を神園山麓まで東西に走る市道として1本だけ生き残っている。(付図8 掩体壕の実測図を参照)

- 当時の廣畑小(現託麻西小)も後方部隊の宿舎となり、廣福寺には通信隊が駐屯。大きな農家には航空隊員が宿泊し、納屋は整備機材の置場や作業場となった。

下南部の竹林や峠山(西原郵便局の向かい側のマンションの所)には、特別攻撃隊の若い隊員の三角宿舎がつくられていた。

- 飛行場南東の小峯丘陵地(戸島2丁目)には高射砲陣地が、迎八反田居の北側には高角の機銃座が構築され、微力ながら一応の対空陣地が構築されていた。

帯山練兵場北東端の松林(西原中付近)には、重爆撃用の爆弾が集積保管されていた。

- 空襲時、飛行場の攻撃目標をそらすためか、帯山練兵場の一本榎(現帯山小入り口バス停)と戸島の葉山神社西に 竹で形を作ったおとりの偽装の隼戦闘機が並べてあった。

- 沖縄戦が始まると、重爆撃機「飛龍(キ-67)」は、爆弾を抱いて夕方から夜半にかけて、3~4機の編隊で、時間をおき、3回程に別れて飛び立っていき、明け方 フラフラと帰投していた。その時機影が1~2機減っていたり、また練兵場との境の堀りまでオーバーしている機影を時々見受た。

- 時に戦火をくぐり、傷ついた何機が三菱の工場に搬入されたこともあった。この時初めて飛龍の武装された姿と、被弾の凄まじさに工場関係者は驚いたという。

- 昭和20年5月中旬になると、飛行場周辺の警戒が特に厳しくなった。^{九七}
5月24日の夕刻、当飛行場からあかね色にそまった金峯山上空を目指して旧式の爆撃機12機が発進した。空挺特攻の義烈空挺隊でした。

奥山道郎大尉(26歳)の率いる攻撃隊136名、諏訪忠一大尉(26歳)の輸送飛行隊12機32名、合計168名でした。

飛行場跡地にあった慰霊碑「義烈空挺隊之碑」は、県立女子大建設時、陸上自衛隊健軍駐屯地(西部給監部)の北西の一角に移設されている。

碑の横に立てられている案内板には、次の様に記されている。

義烈空挺隊とは、国軍最初の落下傘部隊である挺身第一連隊第4中隊を以て編成し、第二次世界大戦末期 沖縄に進攻した連合軍を撃滅するため 既に敵の手中にあった沖縄北(読谷)・沖縄中(嘉手納)両飛行場を奪還するため昭和20年5月24日 金峯山に日没する頃 健軍飛行場を勇躍出撃し、両飛行場に強行着陸し、勇戦敢斗ののち玉砕した部隊のことである。この碑は、祖国の悠久を信じ殉国した先輩達を永遠に顕彰するため建立されたものである。

3) 終戦

- 終戦時には「飛龍」を始め、「新司偵・九七重爆撃機・他連絡機」などいろいろな機種が整然とならべられていた。
健軍飛行場では、進駐軍により武装解除のあと、それらの飛行機はガソリンをかけて焼却、または爆破された。
- 戦時中に急造した飛行場は、終戦と同時に旧地主に返還され、再び田畑に作りかえられたケースが多いが、健軍飛行場は滑走路部分を残して、昭和20年11月に開墾の鍬が入った。

4) 熊本空港再開

同28年(1953)4月、飽託郡廣畑村に熊本飛行場設置に関する告示がだされる。

同32年(1957)8月に陸上自衛隊の西部航空隊託麻原分屯地が開設。(保有機12機)

同35年(1960)4月1日熊本空港開港。

飛行場の名称： 熊本空港

設備の概要	着陸帯	長さ1,320m×幅30m
	滑走路	長さ1,200m×幅30m
	誘導路	長さ78m×幅12.5m

- ・開港当時は、熊本ー東京間と大阪で乗継いで5時間15分
- ・同37年頃から、50席以上の大型機の乗り入れ、さらに国際空港化が論議されるように

なるが、託麻三山（神園山・小山山・戸島山）や立田山・熊本県庁などが障害、さらに地元飽託郡託麻村との折衝も順調に進んでいないことから、熊本空港の拡張案では国際空港化は困難と判断。同41年(1966)新空港の候補地に高遊原が選定された。

同46年(1971)3月31日、健軍飛行場跡の空港は閉鎖。開港から11年でその役割を終えた。

同年4月1日 高遊原台地の現熊本空港が開港。

同35年から46年までの11年間の乗降客は91万8,262人（乗客45万4,207人・降客46万4,055人）に達していた。

3-4 技能工を養成した青年学校

東西の道路をはさみ、「工場群」の南側、現東本町に技能工を養成する青年学校が作られた。自衛隊道路に面した部分（自衛隊病院西側）は三菱病院建設予定地であった。

1) 私立三菱熊本青年学校

「熊航」の青年学校は、昭和18年(1943)4月に開校する計画で準備が進められていった。即ち、学校校舎、実習工場などの付属施設は勿論のこと、それまでに優秀な生徒の確保が必要であった。

同17年9月から青年学校生徒募集に、熊本県下は勿論、九州一円を東奔西走し、優秀な人材の確保にも努力した。その結果、「熊航」青年学校第一期生1,500名の生徒が入校し、予定通り同18年4月開校の運びとなった。

- 昭和18年(1943)4月1日、飛行機製造工場の中堅技能者養成のため、「三菱重工業（株）私立三菱熊本青年学校」が開校した。

青年学校は、「教室棟ゾーン・実習工場ゾーン（県営東町団地の部分）・それに運動場（現自衛隊病院の部分）」の配置となっていた。

資格は、尋常高等小学校高等科2年終了者で、教育年限3年。専従職員30余名。生徒数第一期生1500名、全員入寮（1寮と2寮に）

一小隊60名の25小隊編成で学科と実習に 全て軍隊式で厳しい教育訓練が行われた。

- 同20年4月第三期生まで入校。この第三期生には秋津尋常高等小学校卒業の女子養成工（裁縫）も入校した。

週3日は学科、週3日は実習の予定。

学科は「徳育・国語・歴史・数学・物理・力学・製図・体操・教練」、実習は初めの内は「ハンマー振り・ヤスリ掛け」という基本動作であった。

- この厳しい教育訓練を受けた特に第一・二期生のなかから、戦後熊本の機械加工、钣金加工等の製造業のレベルアップと発展に貢献した人々が多数輩出した。

- なお第二秋津寮の一棟で診療していた三菱病院（病床30床）が、昭和19年10月青年学校内に移転し、同20年6月空襲を避けて、湖東2丁目の職員住宅に分散移住するまで、病床168、従業員263名で診療に当たっていた。（市民病院の前身）

8ヶ月

- 終戦。同20年11月30日、私立三菱熊本青年学校は廃校。

2) 戦後の様子

防諜の関係から第九製作所と称していた三菱の工場「熊航」は、戦災を逃れた青年学校の実習工場を活用して平和産業に転換。

- 昭和22年(1947)12月1日から「三菱重工業(株)熊本機器製作所」と称して農機具の製造に着手したが、思うに任せず、同24年秋閉鎖のやむなきに至った。
- 同24年9月30日付けて農業機械専門メーカーの井関農機株式会社(本社松山市)へ譲渡した。その規模は、
土地: 工場用地 4万9400坪、社宅用地3万2942坪、計8万2342坪
建物: 工場及び事務所5146坪、社宅311戸4738坪、計 9884坪
であった。社宅には「水菱園・健菱園」の一部に江津荘や神水荘なども含まれていた。
人員200名も引継ぎ、同24年10月1日、「井関農機(株)熊本製作所」として操業開始。
(自動脱穀機と粃摺機を生産)

- 同25年6月25日朝鮮戦争勃発。戦争は警察予備隊の設置を促し、支隊の熊本駐屯が決定。大慌てで内部(総事務所と鋳造工場)の移動を終えた井関農機(株)熊本製作所の一部敷地(西側の事務所と運動場の部分)1万7000坪を同年11月15日付けで国が買収。
- 同日、警察予備隊熊本支隊「1500人」の先遣隊が、引き込み線から井関の事務所跡の宿舎に入り、東本町西側部分は警察予備隊の駐屯地となる。
警察予備隊は、その後保安隊、自衛隊となり、現在の健軍駐屯地、清水町の熊本駐屯地へ移転。運動場部分は、自衛隊熊本地区病院となっている。
- 同29年12月1日、井関農機(株)熊本製作所は、井関農機(株)熊本工場と改称。西側を国に譲渡した井関は、自動脱穀機の専門工場として東側部分で操業していたが、農業機械の大型化と多様化に対応するため、同50年(1975)益城町安永に益城地区新工場を建設。
さらに同55年(1980)4月、健軍地区の人員・施設を益城地区に全面移転統合。
現在は、コンバイン専門工場の「(株)井関熊本製造所」として操業している。

3-5 付属病院 (三菱病院から熊本市民病院へ)

病院は、健軍終点から自衛隊通りを上った右側、現自衛隊病院との間が建設予定地であったが、最後まで建設されないまま、転々として終戦を迎えた。

1) 医務室から診療所へ

昭和18年に入り従業員の増加に伴い、その医療施設の揺籃として養成工寄宿舍第二健軍寮(現若葉1丁目)の一室に、「医務室」として発足。

同年8月5日、第一健軍寮の管理棟50坪に「三菱診療所」開設。

2) 診療所から三菱病院へ

さらに、応急的措置として翌19年3月10日、第二秋津寮(女子)の一棟200余坪を改造、病床30床を有する病院に昇格。

当時病床200床を有する病院の設計は完了していたが、戦局の状況上、青年学校の建物2000余坪を病院に転用することに決め、同19年10月3日同所に移転。病床168床、従業員263名の病院となった。

翌20年6月、工場を目標とする敵機の来襲頻繁、危険度増大。そこで同月15日、職員用水菱園社宅（現湖東2丁目）29棟に分散移転。

3) 三菱病院から民生病院へ

同20年8月終戦を迎えた。

同年10月15日、職員合宿寮「報国寮」であった現在地（現湖東1丁目）に移転。診療機構を統合した。

11月16日より戦災による医療機関の不足を緩和し、市民の利便を図るべく、名称を「民生病院」と改称し、軍需工場が備えてきた産業医療をあらためて戦災市民に開放することになる。

4) 精業ストライキで熊本市民病院へ

- この段階まではよかったが、三菱本社の方針が変わり、熊本工場に対し、工場も病院も縮小・半減せよと内示してきた。

当時の職員は84人、本社の指示通りに縮小すると総合病院の機能を失ってしまい、且つ市民へ開放した趣旨にも反する。

職員も大量解雇させられてしまうとあって、本社の内示に対して対立、継続経営を交渉し続けるが、それは三菱本社に容れられなかった。

戦中に確保してきた貴重な医療資源を県外の他地区に移そうとしているとの情報もあり、この地域医療を守ろうという公憤も沸き上がった。この病院の全職員（78人）が総決起し、「全従業員精業ストライキ宣言」を決議することになる。

昭和20年12月27日付けの宣言決議であった。それによって同病院は従業員管理を確立し、従来通りの診療活動を続けていくことになる。

- 院長が中心のラインの決起だけに、「精業」を冠したストライキを標榜する結果となっている。終戦直後の思想転換、労働組合主義の走りの導入であり、新時代をいち早くつかみとり、その力をバネにして生き抜こうとする当時の世相を伝えているようだ。
- 地域住民に訴える、この医療機関のスト権決行は米駐留軍の注目するところとなった。労使の仲介、交渉がかなりの曲折を経て進んだ末、熊本駐留軍政官指令が熊本市長に対して発動し、「民生病院」は市移管へ決まっていた。（病床76床）
そうして、施設・人員は現状のままで、昭和21年2月1日「熊本市立民生病院」として発足した。市は三菱に、同23年度から三ケ年で支払って財産の移転登記を完了している。

5) 市立熊本市民病院へ

市は同病院の名称を同24年5月10日付けで「市立熊本市民病院」と改めた。

施設規模は、病床135床、従業員95人、8診療科。

- 「精業スト」が点火した形で発動した駐留軍政官指令は、当時、枯渇しようとする地域医療の確保へ、「渡りに船」の役割をかった。

熊本市長には、病院の引き継ぎと維持に関して必要な措置」を指令し、一方、三菱財団に対しては「財産・設備を移転することを禁じ、病院運営を妨ぐる措置をとってはならないよう」指令したのであった。

- 市民病院となったこの病院は、以来、医療法の定める総合病院の高次医療を目指して、増床や医療機器の導入、専門医の充足などを重ねつつ、市民医療の実績を着実に積み、現在にいたっていた。

(34診療科・556床)。しかし平成28年の熊本地震で被災し、診療科を縮小して現在診療中。さらに、本年10月の開業を目指して、東町4丁目(国家公務員東町北住宅跡)に新病院を建設中。

3-6 福利厚生施設

「熊航」の主要従業員は、名古屋から転勤してくる基幹社員である。

続々と名古屋から来る基幹社員を受け入れる社宅が早急に必要であるので、次の三地区に社宅が建てられた。

- ・ 即ち江津湖畔の風光明媚な所に180戸の職員社宅
- ・ 工場に近い健軍町6000番地に三菱が建てた1500戸と同敷地に福岡住宅営団が建設した582戸の工員社宅。計2,082戸。
- ・ 水前寺に三菱と住宅営団が建てた268戸の工員社宅社宅。
の三群からなっていた。
- ・ その合計戸数は2530戸に及び、寮と合わせると収容能力は14,860名であった。

〔付図7を参照〕

- 独身者用の寮は、「健軍寮と秋津寮」、職員用の「報国寮」

さらにこれら建設した寮とは別に既設の料亭や屋敷を買収して寮や社宅にしたものがあった。

1) 職員社宅 (現湖東2丁目)

職員社宅の建設地は、健軍の字「江津原」と江津・下江津の一部に跨がるが、昭和17年(1942)一筆に合筆され、「健軍町900番地」となる。

職員社宅は、正員(事務・技師・工師)以上の妻帯者を入居させるためのもので、これを「水菱園」と称し、180戸建設された。

番地はすべて900番地であるため、管理上五十音の「か・れ」という大区分があり、そのあとに序番がつけられていた。すなわち「かー5」というような番号が付けられており、同じ型の建物に迷うことなく管理されていた。

- 家屋はすべて一戸建て、約100坪の土地に25坪程度の家屋が建てられた。

間取りは「8畳二間、6畳、5.5畳に玄関、台所、風呂、便所」がついていた。

風呂は、風呂釜が入手できないので間取りだけであった。従って風呂は職員社宅地区に一ヶ所の共同浴場があり、これを利用していた。

台所にはカマドはあったが、燃料がないため、当初は建設現場からカンナ屑や木切れを拾って来て燃料にした。

幸い庭が広がったので、そこに野菜やさつま芋、小麦まで作って食料の足しにした。

- 造作はすべて安造りであったが、戦時中のことで国民生活は耐乏を強いられており、誰も不平を云う者はいなかった。

2) 工員社宅

名古屋からの基幹工員の妻帯者を入居させるためのもので、健軍町6000番地（現新生1～2丁目・水源1～2丁目・南町）と水前寺地区（水前寺3丁目）であった。

健軍町6000番地の社宅を「^{けんりゅう}健菱園」、水前寺の社宅を「^{ぜんりゅう}前菱園」と称した。

健菱園には三菱が1500戸建てたが、飛躍的に増加する現地採用で通勤不可能者を入居させるため絶対数不足となり、福岡住宅営団が建てた582戸を買収し、又前菱園には住宅営団が建設した家屋268戸を買収した。合計戸数2350戸に及んだ。

- 管理番号は、前菱園が「い・ろ」、健菱園が「ほ・へ・と・ち・り・ぬ」であった。

例えば健菱園の「と」の地区はさらに1～4プロヨクに分かれ、さらに一戸一戸の番号がつけられ、「とー2ー25」と云うような番号が、昭和31年(1956)まで居住者に愛用された。

- 工員社宅は二戸建てで、一棟を半分に仕切り「六畳一間、四、五畳一間、玄関・台所・便所」からなり、広さは「1号から3号まで」三種類あり、号数が大きくなるほど建坪が広がった。

一戸当たりの土地は約40坪、家屋建坪は13～14坪程度であった。

風呂はもともと各戸にはなく、社宅中央部と営団住宅の中央部にある共同浴場へいくことになっていた。随分広い浴場であったが、何せ何千人という人口を有する集落だけに、ピーク時は芋を洗う様な活況を呈していた。

このほか、理髪所、配給所等もあり、一応生活必需品の調達は可能であった。

- これらの社宅は、戦争末期に、しかも戦時規格で急造されたものであるが、昭和60年代までは当時のままで使用されているものも散見出来た。

3) 独身寮(A) — 「健軍寮・秋津寮」

独身寮は、健軍町と上益城郡秋津村との境界（現在の若葉1～4丁目・栄町）に建てられた。

「1寮から5寮、（なぜか6・7寮がなく）8寮」の健軍寮と、「秋津1寮・同2寮」があり、それぞれ単身赴任者・独身者を収容した。

- 1寮・2寮は青年学校生徒、3・4・5・8寮は各地から採用した独身工員、徴用工を収容。

秋津寮には女子挺身隊・女子工員を収容した。

- 各寮は5棟からなり、一部屋は12畳で、その中に5人^ず起居した。

これら寮の管理は、軍隊式に分隊・小隊などの編成があり、小隊長等の中間監督者には名古屋から転勤した基幹工員が当たっていた。その上に寮長・舎監等があり、各寮の統括的管理をしていた。

毎朝出勤は全員が整列して工場西側の都大路を上がって正門から入り、それぞれの職場に行った。

- これら健軍寮は、昭和20年7月1日の空襲で、1・2・3・4寮と秋津寮が消失。5寮と8寮が残り、戦後は海外引揚者を収容し、一棟に20世帯入居しており、全部で5棟あったので8寮だけで100世帯位入っていたのであろう。

- 同じ建内に居住しながら、一部の人は熊本市、一部の人は秋津村民といった恰好になり、教育とか物資の配給事務は熊本市が取扱いながら、納税と選挙の関係は秋津村に属するという変則な状態が続いていた。

※ 昭和29年秋津村が熊本市と合併

昭和27年(1952)4月1日付けで「秋津村」の境界変更、熊本市編入になり、住民の(533人)は、名実ともに熊本市民となった。~~(秋田地区一部熊本市へ、変則解消)~~

- 昭和18年に建設されたこれらの木造の寮も、20年余の役目を果たし、昭和40年に鉄筋の県営住宅として生まれ代わっている。
- 隣の5寮は、戦後の「熊航」の清算時代から熊本機器製作所の時代は独身社員の寮として使用。熊本機器製作所閉鎖後は、西部整理事務所が入り、整理事務をおこなった。
- 戦後この三菱寮(健軍1・2・3・4寮と秋津寮)の焼跡にぼつぼつと、最初はバラック建ての簡単な店で商売を始めた。
昭和25年には16店舗、26年には20店舗、29年には34店舗と増加し、商店街も組織化され、いろいろ自助努力をされて、現在の健軍商店街と発展した。
昭和20年、三菱寮の焼跡に忽然と現れた数軒の店舗から、今日の健軍商店街の姿を誰が予想できたであろうか。

4) 独身寮(B) — 「報国寮」

職員の准員(書記・技手等)独身者の寮として報国寮というのがあった。
これは神水(現湖東1丁目)にあり、規模は健軍寮とはほぼ同じであった。終戦前に病院を移設するために、その時点での入居者を全員健軍寮5寮に移し、ここを三菱病院とした。
戦後は民生病院・市民病院として活躍し、現在では熊本市市民病院として生まれ代わっている。

5) その他の施設

その他の施設として「江津荘・白川寮・城東寮(女子)・神水荘・初音寮や工員クラブなどがあった。あらたに建設した寮とは別に既設の料亭や屋敷などの建物を買収して寮にあてたものであった。

江津荘は、現出水2丁目6番で、県立図書館や近代文学館となっている。

工員クラブは、戦後視聴覚不自由児収容施設「ライトハウス」として使用され、現在では立派に改築されている。

3 - 7 水源地

1) 三菱の水源地

三菱の工場や青年学校及び水菱園・健菱園の両社宅・寮への給水を自給するため、三菱が現健軍水源地に専用水道として「深井戸5基、集水井2基、吸上げポンプ3基、貯水槽、ポンプ室」などを設けた。

(当時の水源地及び設備配置図は、付図6を参照)

2) 戦後 頼りにされた三菱の健軍水源地

熊本は水の豊富な土地だといわれているが、戦後の状況は、戦災、そうして資材不足、労力不足で漏水の補修が進まず、さらに進駐軍の兵舎および市内に点在する米軍の施設・宿舎には24時間

給水が要求されていた。それで民生用は「桶一杯の水で一日の用を賄う」位の制約を受けていた。新町で出火、水不足でむざむざ20戸を全半焼、24世帯、120人余が焼け出されたこともあった。

戦時中から市水道の需給バランスを懸念していた水道課は、当時の三菱の水源地に着目。内々のうちに調査してスパイと疑われることもあったというが、戦後あらためて質・量ともに水源地として好適であると確認。熊本財務局の許可を得て市に移管。

昭和23年2月25日砂取・水前寺を経て味噌天神ほか2ヶ所への通水式をおこなった。市はその後再々拡張して現在に至っている。

現在は健軍水源池と沼山津・秋田水源池は、市水道の最大供給となっている。

3-8 その他の施設

1) 電気とガス

① 電気

工場、青年学校、社宅、寮などの戸外までの電力設備は、九州電力が行い、三菱担当分の建物に対する室内配線工事は三菱で実施した。

② ガス

電力と同様、三菱施設の建屋内部の配管は三菱でおこなったが、工場地域までの配管は西部ガスが敷設した。

西部ガス春日製造所（現熊本支店所在地）と健軍の三菱工場間は、地下パイプラインで結ばれ、ガスは主に飛行機部品の硬度を高めるための熱処理に使われていた。

2) 輸送機関―「鉄道引込み線と市電延長」

① 鉄道引込み線

軍用飛行機を造るには、多くの資材・部品・機械類が必要になる。現在のように大型トラックやコンテナなどの発達していない74年前では、鉄道による輸送しかなかった。

この資材・部品・機械類・人員の輸送のため、国鉄水前寺駅より、健軍の三菱工場内倉庫ゾーン（現在の東町4丁目）まで専用鉄道引込線が国鉄により敷設された。（工場建設当初からと思われる。）

○ 自衛隊通り（都大路）と呼ばれる広い通りの両側には、桜並木が1500m程続いているが、健軍本町・錦ヶ丘、尾の上2丁目側は、桜並木より西に通常の歩道より広い路側帯が続いている。さらに自衛隊通りの北端の三叉路から下灰塚橋を渡り、北西の京塚バス停を経て渡瀬の方向へ真直ぐの道路がある。これがかつての鉄道線路跡である。

○ 朝夕は従業員（動員学徒・挺身隊も含む）の輸送に気動車が運転され、自衛隊通り中央部の簡易プラットホームで乗降していた。

日中は必要に応じて資材の輸送に使用された。

戦後熊本機器製作所の時代（昭和24年）まで使用されたが、昭和30年代に線路は取り外された。

- 現在はこの線路跡を道路として使用しており、この道路のことを「引込み線」と呼んでいる。朝夕のラッシュ時には多くの車の通行で賑わっている。

京塚バス停付近が交通安全上問題になっていたが、これは付属飛行場建設に伴って付け替えられた「県道戸島熊本線」と「引込み線」が最も接近していたことによる。

- 昭和23年、工場内引込み線やプラットホームの跡地に、真先に工場を操業し、戦後の繊維産業により日本経済の復興の先鞭をつけたのは「中央紡績」であった。

「中央紡績」は、青年学校跡の「井関農機」とともに健軍地区発展の牽引的な役割を果たしてきた。その中央紡績も昭和53年に閉鎖。現在は住宅団地、健軍東小学校や東町中学校などがあり、工場内引込み線のあった所はまさに文教地区になっている。

② バス運行

通勤手段として引込み線を大部分が利用したが、水前寺からは社有の電気バス3台を運行していた。そのため市電の水前寺電停付近は、これらバスに乗る人で混雑し、時には積み残しも出る始末で交通機関の充足が痛感されていた。

③ 市電延長

昭和18年9月、勅命を帯びた査察師一行が、「熊航」の航空機生産状況を査察に見えた。その時、生産の隘路になっている問題点を報告せよとのことであった。

- 「熊航」では通勤交通手段について懸念を抱いていた。

即ち、150万坪にも及ぶ敷地を計画、それに対して人員、資材を運ぶ交通機関は引込み線のみで皆無に等しかった。いかに人をを集め、2直・3直に応えられる宿所を作ったとしても輸送機関がなくしてはどうしようもないと。

- 「熊航」としては、熊本駅から水前寺まで来ていた市電を健軍の工場まで約4km延長をと。この交通手段の充足を答申した。

- その結果、健軍までの幅員22mの道をほぼ一直線に通し、3.3kmに亘るその道路に、市電の延長工事が行われることになった。同19年10月25日着工。

この道路拡張工事には秋津村をはじめ近郊の婦人等による勤労奉仕も行われた。

- しかし鉄材不足の折から、新設するレールはなかった。

同19年3月1日に熊本電気軌道から、休止路線となっていたのを買収し、他に転用を考えていた「百貫線（百貫石―田崎＝6.5km）のレールの一部をやむを得ず流用し敷設した。

昭和20年5月5日、水前寺―健軍間（3.3km）が単線で開通した。

途中神水に退避線があり、ここで上下線の退避をしたため、待ち時間が長く、輸送量はかぎられていた。

- また、その頃健軍工場は概ね疎開していたので、この市電の延長建設は戦力にはそれ程寄与せぬまま終戦を迎えた。しかしこの道路と市電は戦後熊本市東部の発展に大きく貢献した。

- 人口増加に伴って複線化が計画され、水前寺―商業高校前間は、昭和25年12月20日

商業高校―神水間は、同26年12月

神水―健軍町間は、同27年7月1日

に開通して健軍線の複線化が完了。現在に至る。

3) 道路の新設と付け替え

① 水菱園と前菱園の連絡道路の新設

水菱園と前菱園の間には、庄口川流域の水田が入り込んでおり、両社宅の往来には「木山往還」を通り、大回りをしなければならなかった。そのため、両社宅を最短距離で結ぶ「連絡道路」が必要であった。

それは第二期工事（昭和18年度）として行われ、小山を削って、水田を埋め基幹道路とした。昭和19年に完成し、完成後は水菱園からこの道を利用して工場に通うことが出来た。

（付図7 複利厚生施設の配置図参照）

② 旧木山往還の改良（現熊本高森線）

（前述 2）の③） ○直線化 特に健軍4丁目（神水の返電所～健軍神社入口間）
○幅員22m 水前寺～健軍間（3.3km）

③ アルコール往還の付け替え

戸島から帯山通りを通過して神水一丁目の砂取小学校正門までの道（旧県道戸島熊本線）は、「アルコール往還」とか「カライモ街道」と呼ばれていた。

戸島北向から真っ直ぐ西進し、ほぼ現在の月出小学校正門前通り、三郎の集落の中、さらに帯山練兵場の一本榎木を通過して現在の東バイパスとの交差点までは、ほぼ真っ直ぐな道であった。（現在の月出小通り—帯山通り—県庁西門通り）

- 現在の県道戸島熊本線は、「熊本東部青果市場の所から大きく南へ曲がり、新外入口・灰塚京塚・東水前」を経ているが、これは三菱の付属飛行場建設の時、飛行場にかかるので迂回路として付け替えられた。
- アルコール往還とは、「熊本市東部の畑作地帯の甘藷の需要拡大・販路先の酒精工場の設立と原料を運ぶ道路の、建設に尽力した人たちへの畑作農家の感謝の思い、その現れではないか」しかしそのアルコール会社も既に無く、アルコール往還との呼び名を知る人も少ない。

4) 排水路の建設

① 付属飛行場の排水路

飛行場内の日赤付近は、長嶺の「龍蛇平」、県立大付近は「月出山」その西は「水洗」という字名が示すように、豪雨の際三郎方面に激流となって流れる「三郎灘」と呼ばれる雨水があった。

この飛行場東端部には、枯れ川といわれていた堀切の南郷往還が交錯し、降雨時の野水の流路が遮られることとなった。

従って、飛行場の水ハケを良くするためにこれらの雨水と南郷往還の野水を流す排水路が江津湖まで掘られた。

この排水路と南郷往還が繋がったのが、健在の健軍川。従って健軍川の上流のルーツはかつての南郷往還。

ヒョウタンチ

- しかし排水路（現健軍川）が掘られたため、神水瓢箪淵から江津原（現湖東1～2丁目）へ流

れ、20町歩を潤していた上無田用水路「深堀」は、切断された。

(深堀は、天正15年(1587)加藤清正公が一夜の内に掘らせたと伝える用水路、深さ5m延長約500m。清正公の知られざる小さな水利工事)

- 健軍川は、託麻原台地を貫流して江津湖に流入する一級都市河川(江津湖～加勢川～緑川と緑川水系による)である。

平成11年長嶺中学校東(戸島西3丁目)に遊水池が作られ、改修工事も南郷往還との接点近くまでは終わり、現在長嶺中北側の橋の掛替中である。

② 若葉排水路

工場の排水路は、工場の東側から南側を通り、西無田橋の東で秋津川につないであり、若葉排水路として現在も利用されている。

健軍川と同様で都市化による大雨時の道路冠水などの対策工事が行われていたが秋津新町と若葉地区に浸水対策の施設が、平成27年度に完成している。

3-9 従業員について

1) 従業員数の推移

「熊航」の従業員は一体何人いたか?との質問に対し
あれだけの大きな工場だから最盛期には学徒・挺身隊も含め5万人位か?と言う人から4万人・下は1万人はいたろうか と随分幅があった。
しかし今となっては年度別に把握された資料もないので明確な数字は不明とされている。
が関連資料による判断は次の通りである。

① 昭和18年3月現在

	名航からの転勤者	熊本採用者
職員	若干名	若干名
工員	180名	300名
青年学校生徒	若干名	1,500名(1期生)

② 昭和19年には

「名古屋から転勤した基幹社員を中心に、熊本採用 名古屋で訓練を受けて帰って来た者、熊本要員として名古屋で新規に採用された者、新規採用工員、青年学校生徒、勤労働員学徒、女子挺身隊をはじめ応援の軍人」など加速度的に増加していった。

青年学校生徒は、1期生(18/3入校) 1,500名
2期生(19/3入校) 1,500名
3期生(20/3入校) 1,500名? 計4,500名と思われる。

③ 昭和20年8月現在では

戦後、熊本県の照会に対する三菱重工業（株）総務部の回答は、次の通り報告されている。
これが最盛期の公認人員であろうとされている。

被徴用者	女子挺身隊	勤 勞 動 員 学 徒			合 計
		大学・高専男子	中学男子	中学女子	
12,525名	2,012 名	806名	2,095名	1,520名	18,958 名

2) 労働力の強制動員

昭和16年頃から急増する労働力需要に対し、従来行われてきた農村労働力や、学校卒業者等では応じきれず、それに対応するためには、徴用による動員を急増させるほかなかった。
徴用の対象者の多くは、「不急産業」と「中小商工業」からの転業・廃業の労働力であった。
開戦とともに徴用制は労働力動員の「伝家の宝刀」として全面的に発動された。
多くの中小企業は軍需産業への転換が不可能として、強引な企業整理を断行した。

昭和19年になると、要申告者を「男子12才～60才」、「女子12才～40才の未婚者」まで拡大した。

即ち、未就学児童、国民学校生徒、既婚女子、60才以上の老人」を除く全国民に申告義務が課せられ、国民を強制動員する「国民皆労体制」が導入されたのである。

しかしすでに男子の基幹労働力は枯渇していたから、19年度計画を充足するためには、在学中の学生、生徒など若年労働力を徹底的に動員するほかなかった。

その方策は「①徴用工・②女子挺身隊・③学徒動員（大学高専・中学（男子）（女子）」として編成動員された。

このような未熟連・未経験労働力の強制動員によって量的不足の充足はある程度できても、労働力全体の質的低下と管理能力の限界は、どうしようもなく、きちんと管理された生産効率・労働生産性を維持することはおぼつかなかった。

3) 労働時間

非常時という条件もあったが、一応定めてある労働時間は無きに等しい様なもので、会社と家の区別が付かない程、会社に入り浸りという生活を余儀なくされた。

ちなみに当時の定時間労働は、朝7時30分から実働8時間であった。
5時以降は残業時間として処理された。休日も建前は「日曜・祝祭日・年末年始・藤崎宮祭日」であった。

しかし、特に19～20年にかけては、これら規定は無きも同然であった。有給休暇や女子の生理休暇も一応とれるようにはなっていたが、あまりとらな^れがった様である。

一機でも 多くという時勢であれば、まさに自己の体力の続く限り働くのを建前としていた。
そのため時間外労働時間が増え、本給より残業手当の方が多かったともいわれている。

4) 従業員管理制度

従業員各人の学歴、勤続等により、その人の身分（資格）を定め、その身分によって処遇を決める身分資格制度を採っていた。

資格は「職員・雇員・傭・工員」の4つが設けられ、職員については「参与・参事・正員・准員」

の4等級、工員については「一等工手・二等工手・三等工手および普通工員」の4等級にわけられていた。

また業種によって職種が設けられており、その幾つかの例は次の通りである。

		事務職	技術職	技能職	特務職
職員	正員	事務	技師	工師	警務
	准員	書記	技手		守警
雇員		書記補	技手補		守警補
備					寮管理人・賄等
工員				機械工・組立工 鍛金工・溶接工等	

定年は工員が満50才、職員が55才であった。戦後はともに55才になった。

4. 三菱重工業（株）熊本航空機製作所の歴史的概況

昭和16年12月31日	陸軍省と三菱重工業（株）から現地視察後、熊本市健軍町に決定。
同 17年 4月 1日	三菱重工業（株）名古屋航空機製作所に「第二建設部」を設置。
“ 年 6月15日	熊本航空機工場の地鎮祭及び起工式。
“ 年 9月 1日	臨時熊本工場建設事務所開設。熊本工場建設工事に着手。
同 18年 4月 1日	私立三菱熊本青年学校開校式（第一期生1,500名）
“ 年10月 1日	熊本工場建設事務所発足
同 19年 1月 1日	熊本航空機製作所として発足
“ 年 4月	飛龍（キ一67）生産開始
“ 年 4月29日	飛龍（キ一67）一号機進空式
“ 年 9月	済々黷・熊中・鎮西・九学・尚綱・松橋など20校4,000人余動員
同 20年 1月	五高・七高・熊工専・宮崎工専の学生動員。
“ 年 2月 1日	防諜上「第九製作所」と改称。
“ 年 4月 1日	防諜上さらに「報国熊第1011工場」と改称。
“ 年 8月15日	終戦。飛龍（キ一67）46機生産で終わる。
“ 年11月15日	臨時航空機工場整理事務所熊本出張所として整理に入る。
“ 年11月30日	私立三菱熊本青年学校廃校。
同 21年 2月	賠償指定を受け、機械、設備の管理・保全に着手。
“ 年 8月	航空機工場整理事務所熊本出張所発足。
同 22年12月 1日	熊本機器製作所設立。
同 24年 9月30日	熊本機器製作所を井関農機（株）へ譲渡する。
“ 年10月 1日	臨時熊本機器整理事務所をおき、再び整理に入る。
同 25年 1月	西部整理事務所となる
同 29年 1月	三菱重工業（株）西部整理事務所閉所式 10余年に亘る熊本での事業整理を終える。

5. 市東部も戦火に

熊本市は、第二次大戦末期の昭和19年(1944)から20年8月にかけて大小数回にわたり米空軍機により空襲を受けた。

最も激しかったのは昭和20年7月1日と8月10日の大空襲で、当時空の要塞と云われていた重爆撃機B29の大編隊による市街地への焼夷弾及び爆弾攻撃であった。この2回の大空襲で、熊本市の中心市街地は一望の焼野が原と化した。

熊本市は、軍事的には日本一の精鋭と勇名を馳せた第六師団司令部が置かれ、歩兵十三連隊をはじめ各種部隊の兵営があった。またアメリカ軍の沖縄本島上陸開始の昭和20年4月からは本土防衛作戦準備を強化するため、機動師団(決戦師団)として編成訓練された第216師団(比叡部隊)が熊本市を中心とする平地に配置された。(肥後集団と呼ばれた)

市の東方(廣畑・健軍)には軍用飛行場があり、三菱重工業(株)熊本航空機製作所が操業するなど、米軍機動部隊の攻撃目標となった。

昭和20年3月18・19両日の爆撃から本格化するところとなり、米軍沖縄進出後は沖縄及びマリアナ基地から出撃する米軍機は連日にわたり、九州の各都市や軍事施設、軍需工場を空襲し、その様相も次第に熾烈化していったが、6月までは熊本市の市街地や一般市民が受けた被害は比較的に少なかった。

しかし6月下旬頃からは、降っても照っても昼夜をわかつた連日の空襲で、市民は仕事をするこゝと、眠ることも出来ず、食事さえ満足にとれぬ状態となった。

7月1日午後11時50分ころ、本市西方から飛来したB29の大編隊154機は、中心市街地から東北及び白川以東にかけて焼夷弾・爆弾の投下、更に銃撃を加えるなど約1時間にわたって波状攻撃を加えた。

この爆撃で、火の海となった市街地は一朝にして焦土と化し、市民にも多数の死傷者を出した。

次いで8月10日午前11時ころ、東方から進入したB29及び中小型機の戦爆連合の編隊は、白川以東から以南にかけて前回同様の焼夷弾攻撃および機銃掃射を加えた。

この結果市街地の破壊、焼失及び市民の死傷者の被害はさらに拡大された。

この2回の空襲で、下通町・大江町・新屋敷町・安巳橋通町・水前寺町、草葉町・黒髪町の各方面(以上7月1日)、本山町・春竹町・本庄町・大江町の各方面(以上8月10日)は破壊焼失した。熊本市の被災状況は次のとおりであった。

被災面積 市街地面積の約30% 363万975㎡ (109万8370坪)

被災戸数 1万1,906戸(全焼家屋10,416戸・半焼家屋207戸)
(全壊家屋1,249戸・半壊家屋34戸)

被災者数 4万7,598人

死者 617人

(熊本市戦災復興誌

重軽傷者 1317人・行方不明13人

一新熊本市史通史七巻による)

5-1 帯山及び隣接の京塚の戦災

7月1日の空襲の際は、陸軍病院健軍分院は白衣の看護婦が、隣接の熊工では寄宿舍生らが、四方八方に飛び散って燃さかる火を消して廻って何とか安泰であった。しかし動員学徒の寄宿舍防空壕で、壕内に落下してきた焼夷弾を素手で掴んで壕外にほうり投げ、数人の同僚を救ったものの、本人は壕口で直撃弾を受け右半身を一直線に削りとられ、止血出来ぬまま7時間後に絶命した生徒がいた。三菱長崎造船所から三菱の健軍工場に移り、機械加工に汗を流していた機械科4年生であった。

8月10日昼間の空襲時、帯山練兵場中央部は、六角焼夷弾の林だったが、東北部松林の中の爆弾保管場所や一本榎木周辺のおとりの隼戦闘機は無事であった。

また練兵場南側の陸軍病院健軍分院は、正門近くの自動車の焼失などで被害は軽微であった。

しかし道路一つ隔てた南側の熊工では、運動場南側で農作業をしていた学校警備要員の生徒を目掛けた執拗な機銃掃射と焼夷弾投下により、建築まもない本館・教室棟・工業化学科の実験室棟が焼失した。免れたのは寄宿舍及び実習棟のみであった。

5月14日には、学庭の西南隅の森近くの防空壕に駆け込んだ寄宿舍生の5人（1・2年生）が至近弾炸裂により防空壕が埋没し犠牲となる。

5-2 三菱の熊本航空機製作所の被災概要

1) 被災は

昭和20年になると、米機の襲来は激しくなった。3月18日には米機動部隊の艦載機が大挙して県下各地を襲った。この18・19日の艦載機の夜間攻撃を皮切りに、県下への本格的空襲が始まった。

3月18日 艦載機による攻撃を受け、主として鋳金工場が集中攻撃された。

被害は、建物は修理可能程度だったが機械設備7台・死者6名、負傷者13名でした。長崎造船所から赴任3日目の鋳金工場長と若手技師1人が爆死。また県警防団本部の指示により、三菱の警備に出動していた廣安警防団（現益城町西部）の廣崎分団長の上田廣さん及び福富分団員の島田又喜さんが焼死している。

5月13日 艦載機150機来襲し、小型爆弾により事務所等25棟（炎上2棟・大破4棟・中小破19棟）にわたり被害を受けた。尚、機械設備65台が被災・死傷者11名（死者8名・負傷者3名。）

7月1日 熊本市大空襲を受け市内壊滅。夜半の大型機60機による焼夷弾攻撃にて工場内事務所など3棟、水菱園社宅（26棟）、健菱園社宅（13棟）、健軍寮・病院（13棟）を始め、機械設備、仕掛品、完成部品など相当の被害を受ける。

また、市内疎開先6ヶ所、協力工場など10ヶ所が罹災した。白川寮も焼失した。

7月10日 戦爆連合、約140機が熊本市及び県東北部に来襲。内数機が工場を襲撃した。工場高架水道等に多少の損害があった程度で機械設備、建物、人身被害は無かった。

3月から始まった工場疎開で6～7月頃には大部分の工場、人員とも第一次疎開が進んでいたの
6月以後、健軍工場での人的被害はなかった。

2) 被災を避け、生産確保のため工場疎開

昭和20年にはいると、米軍の空襲は本格化し、健軍工場は当然攻撃目標となることが予測され、人身の保護、設備の維持、生産の確保から健軍工場の分散、疎開を軍に具申した。監督官の中には弱腰と避難した人もおり、計画は進まなかった。

しかし3月18日の艦載機の空襲を受け、健軍工場から19人の死傷者が出るに及んでその実行が急がれた。何せ、膨大な設備と人員をどこへ、どの様にして疎開させるかは大きな課題となった。

工場の分散疎開は、「健軍工場を中心とし、熊本市内（14ヶ所）、大津（3ヶ所）、菊池（9ヶ所）、木葉（3ヶ所）、宇土（3ヶ所）、隈庄（3ヶ所）、御船（4ヶ所）の各地区を中核とし、それぞれの地区の工場・学校・倉庫等13,498坪を当てること」にした。

また、これら現場部門に伴って「事務部門も出水・砂取・熊農など近郊の学校の教室に事務所を移し」、また重要な書類等は近郊飯野村（現益城町）の農家の土蔵にまで保管してもらうなどその数30ヶ所に分散したと云われている。

又中枢となる所長室は、疎開先から少しでも便利がよく、比較的安全であろうとおもわれる江津荘に移された。

これらの地区は既設の建物を利用したものから、新たに仮設工場を作ったもの、地下あるいは横穴を掘って収容したもの等、様々な形態で進められた。

山の中に突然出現した工場に地元の人もとまどったであろうが、新工場と共に疎開を余儀なくされた従業員も大変であった。突然家族と別れて山の中の合宿所で不便な生活を強いられることになった。

小物品の移動は人海作戦で進められたが、機械設備の移設には、機動力が必要だ。この時代に民間に機動力のある業者はいなかったので軍に要請した。熊本師団からは、依頼したトラック10台はおろか、戦車、輜重車に加えて兵2千人も出してくれた。

この熊本師団の応援を得た大仕掛な第一次の工場疎開は、「整備工場・組立工場・その他動力保安」のみ残して実行されたが、生産体制づくりの最中にその疎開先ですら空襲に合うなど生産は軌道に乗ることはなく、計画とおりに進まなかった。

計画では「各疎開先で造られた部品を健軍の総組立工場に集め、機体組立^{ぎそう}機装をし、完成機として整備工場へ送る手順」になっていた。

この様に第一次疎開は先ず完了したが、さらに安全を期するため第二次疎開として「地下施設半地下（覆土施設）・地上の隠蔽工場への移行を計画、直に工事に着手、後になって軍の手により作業を継続、終戦時にはその第一期工事（24,330坪）を完了したが、機械設備の搬入は殆どおこなわれず、従ってこれらの施設に於いては全く生産が行われなかった。

（地下施設 17,400坪・半地下（覆土施設） 3,500坪・隠蔽工場7,430坪・合計 28,330坪）

（平成22年2月1日 熊日 龍田町弓削に地下壕発見の記事掲載）

熊本に残した三菱の足跡は大きく、その後の熊本市発展のためには大きく寄与している。しかしその影には多くの人が血を流し、又汗と涙にまみれていた。その三菱の工場と関連施設があったことが、年を経るに従って忘れられ、また知っている人も少なくなっている。

戦場から遠く離れた平和な東部の村々にも命をおとし、血を流し、罹災した人がいた。これらの歴史を知って 忘れず後世につなぎたいものです。

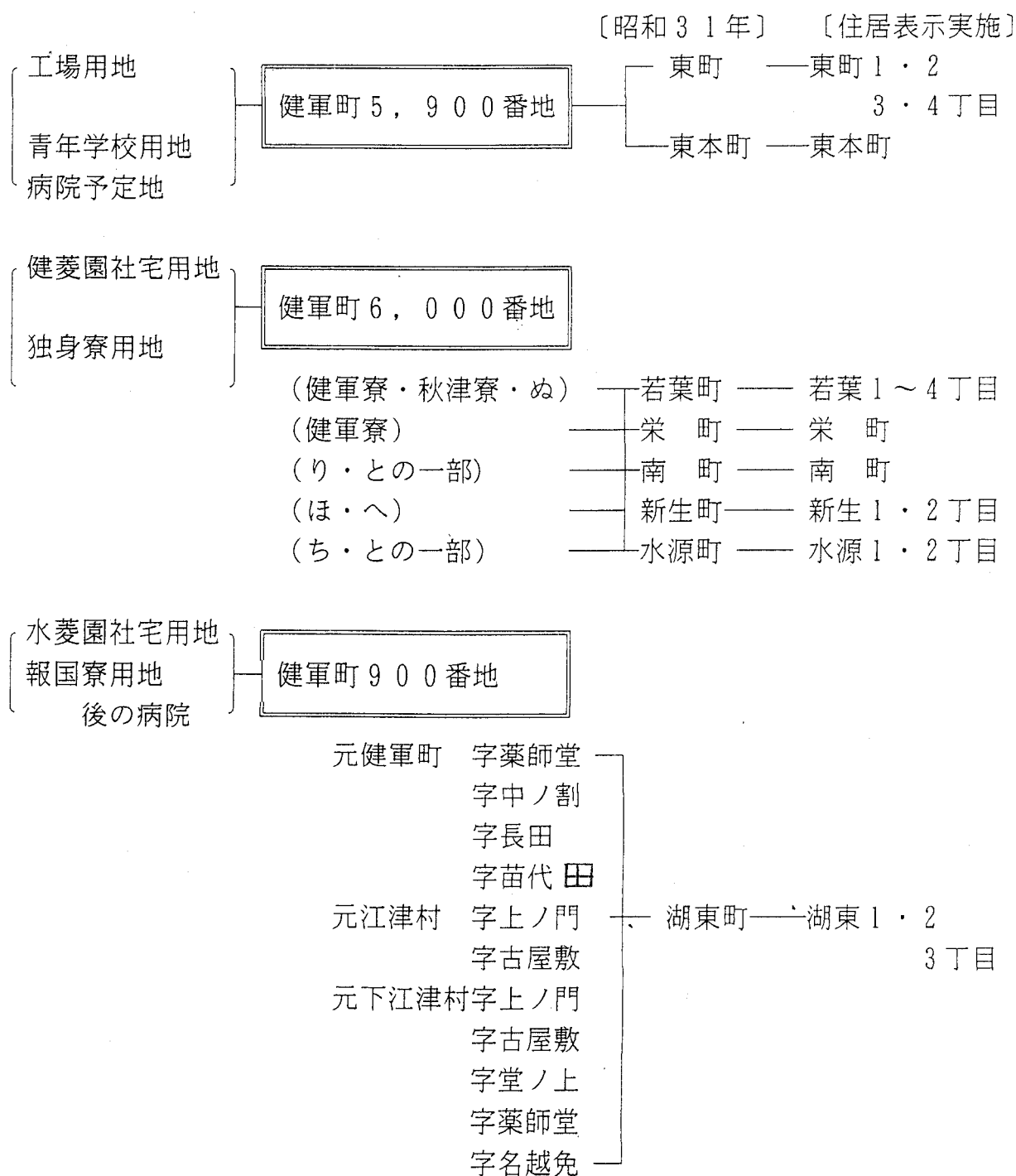
6. 戦争遺産の現在の地名は？

1) 健軍町5, 900番地・6, 000番地・900番地の今は

一筆に合筆され、旧字名の痕跡は完全に消滅されていた元三菱の工場用地及び社宅や寮の用地跡の約80万坪の地域が、区画整理が完了し、昭和31年(1956)11月11日付けで八つの新しい町に生まれかわった。

今まで仮称していた健軍町6, 000番地の「ほ・へ・と・ち・り・ぬ」、900番地の「か・れ」とかの名称はなくなった。

その後数度に及ぶ住居表示の町名町界変更がなされて、現在の町名となった。

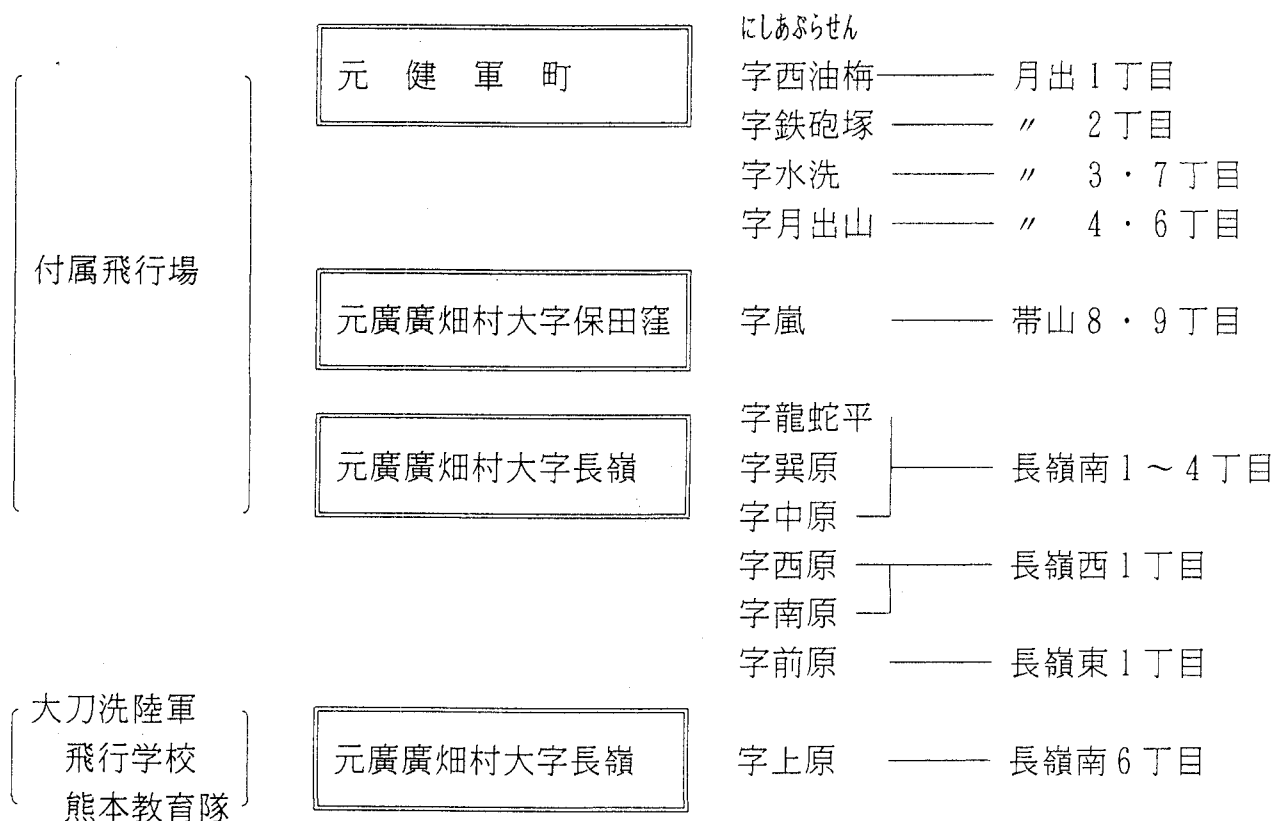


健軍商店街 ——— 健軍寮 1・2・3・4 寮と秋津寮の焼跡
寮前薬局（栄町 1－15）— 焼け残った 8 寮の跡地で 5 寮の前に因むと
思われる。

2) 健軍水源池

健軍町字陣内 ——— 水源 1 丁目

3) 付属飛行場（通称健軍飛行場）跡地



4) 戦後生まれの新しい地名

① 発展願って年号に因む「昭和町」

市電健軍終点の東方。南は県道熊本高森線、北は若葉配水路を境とし、先陣を
きって開発された戦後生まれの町である。

『昭和町生まれる。熊本市秋津町大字秋田字北境塚 1595 番地（宅地 3141 坪）
が、12月1日から昭和町に町名変更』と、昭和 34 年（1959）の同日付けの市政
だよりは広報している。

戦後も終わり、所得倍増・高度成長の光りが差し始めた時代。光り輝く時代と
ともに発展することを願って、年号に因む町名とされたのであろう。

西に接する水玉児童公園は、好字名で秋津新町に入る。公園の一角には再移設

で安住の地を得た「新村の弘法さん」と呼ぶ弘法大師像がまつられている。
弘化3年(1846)の建立である。

町の北側、東本町との境界・放水路沿いには桜並木があり、自営隊通りの桜とともに水玉公園は絶好の花見の場所となっている。

この桜並木は、東本町にあった農業機械専業メーカー井関農機(株)熊本製作所の技能養成所の開設を記念して第一期生の手により植えられた七十本の桜である。昭和27年(1952)の植樹から60年以上、周辺の環境も大きく変わり、桜も既に老木となっているが、今なお地域の人々をなごませている。

県道筋のバス停も「井関前」であったが、昭和55年(1980)4月益城町安永(第二空港線沿い)への全面移転にともない、バス停も「昭和町」となる。

② 万葉集 —— 中学校名から採られた「東野1～4丁目」

北は県道熊本高森線、西は県道六嘉秋津新町線、東は鶯(うぐい)川に囲まれた町域が「東野」である。昭和37年(1962)、東野中学校が開校した。

この校名は、万葉の歌人柿本人麻呂の『東(ひがし)の野にかぎろいの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきむ』の「東の野」から採り、当時の熊本市教育長が命されたと云う。

西は健軍地区の発展に伴い、漸次住宅化の兆しが見え始めていたが、東や南は広々とした畑地や水田が飯田山麓まで続く風景が、この歌のイメージとかさなったものであろう。開校4年後の昭和41年(1966)、中学校周辺の町名が従来の地名とのゆかりではなく、校名から採られた。

即ち、秋津町秋田・沼山津と昭和町の一部が、熊本市の東の広い野を意味する「東野1～4丁目」となった。

鶯川右岸には鶯城跡の窪地が姿をとどめていた。永禄8年(1565)甲斐宗運が築き、甲斐正運を城代とした御船城の出城であった。

7. おわりに

わたしたちのふるさと秋津地区(あさひば)は、戦時中の三菱重工業株式会社熊本航空機製作所の建設が一大転機となり、健軍地区と共に戦後74年の間に人口は八倍弱と大きく変貌し、発展してきた。しかしそれは永年にわたる先人達の血のにじむような水害との戦いの上に成り立っていることをわすれてはならない。

16年におよぶ圃場整備事業が終結したのは平成6年(1994)のことであった。その秋津地区(あさひば)は、現在世対数1万3,834戸、人口3万1,762人(平成31年(2019)3月1日現在)の人々が住む町となっている。

明治24年(1887)	439戸	2,235人
大正9年(1920)	465戸	2,458人
昭和10年(1935)	512戸	2,889人
昭和25年(1950)	846戸	4,417人
平成14年(2012)	12,322戸	32,062人
平成31年(2019)	13,834戸	31,762人

(完)